

# 擬古物語の漢語動詞の特質

——『源氏物語』との比較による——

柚木靖史

## 一 研究の目的

擬古物語とは、『源氏物語』や『狭衣物語』を模して作られた、鎌倉時代以後成立の物語の一群をいう。擬古物語の一群を文体や内容という側面から見るとき、内容的に『源氏物語』などの平安時代の和文を踏襲しており、中世成立の物語らしさを見ることは難しいとされる。一方、語彙や文法という面から見れば、必ずしも、平安時代の和文を踏襲していないという面も見られる。たとえば、齊藤（一九九七）が、下二段「たまふ」と四段「たまふ」の混乱について指摘されたように、言語事象によっては、『源氏物語』とは異なる事象が存する。<sup>1</sup> 齊藤氏が指摘された「模倣は単なる出発点である。だから、擬古物語文体の中には、模倣である部分と模倣ではない部分との隙間が生まれてくる。そこは、その時代を生に写す部分である。過去の事象は当然のことながら、その新しい事象にも、擬古物語であらしめるものがあるのではないか。そこには文法史としての側面、変遷過程、語史としての研究対象の価値がある。」という点は、本稿の筆者も首肯するところである。

そこで、本稿では、漢語動詞を対象にして、語彙的、文法的観点

から、『源氏物語』と擬古物語を比較し、いわゆる和文脈のなかで、何らかの変化が見いだせるかどうかについて検討したい。そして、擬古物語と呼ばれる限られた作品群ではあるが、鎌倉時代の漢語動詞の特徴について明らかにしたい。

## 二 使用数や意味からみた『源氏物語』と擬古物語の漢語動詞比較

### 二—一 一字漢語動詞について

まず、『源氏物語』（以下、『源氏物語』）と表記するの一字の漢字漢語の語幹<sup>2</sup>から成る漢語動詞（以下、一字漢語動詞と表記する）の種類とそれぞれの語の出現数を表1に示す。『源氏』には、36種類の一字漢語動詞が認められ、具体的な使用語は表1のとおりである。また、擬古物語の一字漢語動詞の種類と使用数を表2に示す。擬古物語には、25種類の一字漢語動詞が使われている。作品の分量や内容が異なるので、数値だけで単純に比較することはできないが、一字漢語動詞は、『源氏』のほうが、多くの種類の漢語動詞が使われていることが確認できる。

表1 『源氏』に使用された一字漢語動詞。

念	67	奏	60	誦	48	具	36	怨	34	屈	25	領	24	啓	15
調	15	制	12	請	8	信	7	臆	6	興	4	困	4	講	
孝	3	辞	3	拜	3	秘	3	弄	3	封	3	練	2	先	
要	1	勘	1	感	1	死	1	動	1	難	1	袴	1	服	
用	1	論	1	和	1										

表2 擬古物語に使用された一字漢語動詞<sup>4</sup>

具	58	念	38	奏	36	誦	13	啓	11	怨	7	屈	6	興	5
封	4	案	3	損	3	調	3	制	2	領	2	修	2	詠	
愛	1	臆	1	観	1	信	1	死	1	辞	1	拜	1	変	
困	1														

『源氏』と擬古物語の一字漢語動詞の使用語を比べると、『源氏』の出現数が上位10位以内の漢語動詞については、そのうち擬古物語で上位10位まで出現する語は「具す」「念す」「奏す」「誦す」「啓す」「怨す」「屈す」の7語があり、両方に共通して使われる語がほぼ一致する。『源氏』7位の「領す」が擬古物語で13位になり、9位の「調す」が擬古物語で12位、10位の「制す」が擬古物語で13位となるが、この順位の違いは『源氏』と擬古物語との間で、話の内容が異なるために生じた違いであろう。また、擬古文で8位の「興す」が『源氏』で14位となるのも、話の内容が異なることによるであろう。擬古文で9位の「封す」が『源氏』で22位になっているの

は、「封す」の使用数については、『源氏』が3例、擬古物語が4例であり、やや順位に隔たりがあるものの、使用数に大きな違いはな

い。このことから、「封す」も、内容の違いにより、両者の順位の差が生じたといえよう。ただし、擬古文で10位の「案す」が、『源氏』に使用数がないことについては、その理由が定かではないが、「案す」が『竹取物語』に使われていることから、この使用数の違いも、話の内容の違いによると考えられるであろう。

次に、『源氏』に出現して擬古物語に出現しない語としては、「請す」「講す」「孝す」「秘す」「弄す」「練す」「先す」「要す」「勘す」「感す」「動す」「難す」「袴す」「服す」「用す」「論す」「和す」「按す」がある。「請す」の出現数が『源氏』に8例あるのを除くと他の語は使用数が4例以下であり、使用数が少ない。これらの語は、もともと使用される場面が少ないことが、擬古物語に使用例が無い理由かと考えられる。また、「請す」が、『源氏』で比較的使用数が多いにもかかわらず、擬古物語に使用数が認められない理由についても、「請す」の意味である「僧侶を招く」という場面が擬古物語において少ないためであろう。

一方、『源氏』に出現せず、擬古物語に出現する語としては、「案す」「損す」「修す」「詠す」「愛す」「観す」「変す」があるが、みな、使用数が4例以下である。これらの語が『源氏』で使用されず、擬古物語で使用されるのも、話の内容の違いによる可能性があるだろう。ちなみに、『日本国語大辞典 第二版』によって、これらの語の初出例を確かめると以下のようである。「案す」「損す」「修す」は、いずれも『源氏』の成立時には、他作品に使用されているが、「詠す」「愛す」「観す」「変す」については、初出例が『源氏』以後の作品である。初出例が『源氏』以後の作品である語については、『源氏』以後に成立した語が、擬古物語で使用された可能性もある。「詠

ず」「愛ず」「観ず」「変ず」は、いずれも仏教語としての性質を有する語であり、擬古物語では、そのような性質を有する語を取り入れているのかもしれない。

〔日本国語大辞典に基づく初出作品〕

「案ず」…竹取物語／「損ず」…観智院本三宝絵詞／「修す」…観智院本三宝絵詞／「詠す」…今鏡／「愛す」…堤中納言物語／「観ず」…延慶本平家物語／「変ず」…浜松中納言物語

## 二二 二字漢語動詞について

次に二字以上の語幹から成る漢語動詞（以下、二字漢語動詞と表記する）について、『源氏』で使用された語と、その使用数を表3に示し、擬古物語で使用された二字漢語動詞を表4に示す。なお、表3の「正三位」については、三字漢語動詞であるが、三字以上の語幹からなる漢語動詞はこの一語だけなので表に加えた。

表3と表4を比べると、まず、使用される語の種類については、表3が37語で、表4が38語で大きな違いはないといえる。次に「源氏」と擬古物語間の語の出入りについて確認する。『源氏』と擬古物語で共通して使用される語は25語である。このうち、『源氏』で9例以上の使用数がある8語についてみると、全て擬古物語でも使われている。特に上位3語の「御覧ず（源氏1位・擬古1位）」「対面す（源氏2位・擬古2位）」「用意す（源氏3位・擬古3位）」は使用数の順位も一致している。このことから、『源氏』と擬古物語の間で、使用される二字漢語動詞の種類と使用数に大きな違いは無いと言える。おそらく、『源氏』にしか使われない語や擬古物語にしか使われない語があるのは、両者の内容の違いによるところが大

きいのであろう。

表3 『源氏』で使用された二字漢語動詞

御覧	254	対面	68	用意	14	化粧	14	供養	13	消息	12
誦経	9	加持	9	卑下	8	案内	7	装束	7	追従	6
殿上	5	念誦	5	経営	3	懈怠	3	加階	3	舞踏	3
唱歌	3	出家	2	修理	3	変化	2	精進	2	見証	2
元服	2	参座	2	勘当	1	施入	1	処分	1	喧噪	1
徘徊	1	勤事	1	行道	1	学問	1	逍遥	1	懸想	1
正三位	1										

ここで、擬古物語の方だけに使用される語について、『日本国語大辞典 第二版』によって、その初出例を確認しておきたい。

【初出例が『源氏』と同じかそれより早い語】

「沙汰」（続日本紀 七八六年）／「下向」（小右記 一〇〇三年）／「閑白」（政治要略 一〇〇二年頃）／「作文」（九曆 九〇九年）／「修行」（万葉集 八世紀後半）

【初出例が『源氏』より遅い語】

「祈念」（百座法談 一一一〇年）／「介錯」（吾妻鑑 一一八八年）／「生産」（江談抄 一一二一年頃）

このように、使用例が『源氏』になく、擬古物語にある二字漢語動詞の8語うち、5語は、『源氏』と成立時期が同じかそれよりも早い作品に使われているので、『源氏』に見られないのは、同時代には成立しているものの、『源氏』には使用される場面がないという理由によるのであろう。「祈念」「介錯」「生産」は、『日本国語

大辞典 第二版』によれば、『源氏』より成立が遅い作品に見られるようであるが、史料編纂所のデータベースによれば、このうち「祈念」は、「貞信公記」にあり、「生産」も「貞信公記」に見える。これら二語は、『源氏』よりも早く、真名日記では使われていた語である。ただし、「介錯」は、「吾妻鑑」が初出例のようである。したがって、「介錯」は、『源氏』以後に成立した語の可能性がある。

表4 擬古物語に使用された二字漢語動詞

御覽	237	対面	34	用意	14	供養	9	元服	9	案内	8
消息	5	沙汰	6	経営	5	唱歌	5	殿上	5	祈念	5
化粧	4	誦経	3	念誦	3	装束	3	下向	3	出家	3
見証	2	卑下	2	舞踏	2	三位	2	閑白	2	勘当	1
加階	1	学問	1	介錯	1	精進	1	加持	1	参座	1
修行	1	作文	1	齋宮	1	細工	1	修法	1	逍遙	1
生産	1	追従	1								

なお、「介錯」の用例が見える「あきぎり」は鎌倉時代末期の成立と推定されており、「介錯」は「あきぎり」成立当時は成立していた語である。擬古物語は、『源氏』の語彙を踏襲することを基本としているが、「介錯」のように、『源氏』以後に成立した語を取り入れることもあったと考えられる。

ただし、『源氏』と擬古物語の漢語動詞の異同については、和文とは異なる資料群である真名日記に使用例が認められるかどうかというだけではなく、和文に取り入れやすいか否かという観点からの考察も必要であり、次節では『源氏』と擬古物語の漢語動詞の使用

状況について、出現する作品数や意味の観点から、さらに詳しく見ていきたい。

### 二―三 擬古物語における一字漢語動詞

ここでは、一字漢語動詞が、擬古物語のどの作品に使用されたかを見ていく。使用された擬古物語の作品数という観点から漢語動詞を分類すると次のようになる。なお、作品名は、次のような略称で示す。(あさち・あさちが露 あき・あきぎり 石清水・石清水物語 いはで・いはでしのお 海人・海人刈藻 木幡・木幡の時雨 風に・風につれなき 苔・苔の衣 恋路・恋路ゆかしき大將)

(1) 作品に出現する語 現ず(石清水)／死す(海人)／辞す(苔)／修す(あさち)／変す(あさち)

(2) 作品に出現する語 愛す(あさち・恋路)／臆す(海人・恋路)／観す(あさち・恋路)／詠す(あき・いはで)／調す(石清水・いはで)／拝す(海人・恋路)／封す(石清水・恋路)／制す(あさち・恋路)

(3) 作品に出現する語 興ず(海人・いはで・恋路)／啓す(あさち・海人・苔)／損ず(人・木幡・苔)／案ず(あき・石清水・恋路)／領ず(あさち・風に・恋路)

(4) 作品に出現する語 怨ず(あき・石清水・いはで・恋路)

(5) 作品に出現する語 誦す(あさち・海人・いはで・苔・恋路)

〔6 作品に出現する語〕 屈す（あき・あさち・石清水・いはで・木幡・

恋路）

〔7 作品に出現する語〕 奏す（あき・あさち・石清水・海人・木幡・

風に・苔）

〔9 作品に出現する語〕 具す（あき・あさち・石清水・海人・いはで・

木幡・風に・苔・恋路）／念ず（あき・あさち・石清水・海人・いはで・木幡・風に・苔・恋路）

以上の分類から、擬古物語では、1 作品、2 作品という少ない作品でしか使われない漢語動詞が多いことが分かる。これら 1 作品、2 作品でしか使用されない漢語動詞は、12 種の漢語動詞のうち 6 種が、『源氏』では使用されていない語である。3 作品以上に使われる漢語動詞には、『源氏』で使用数が 10 位に入る漢語動詞のうち 9 語が入る。このように『源氏』で使用数の多い漢語動詞は、擬古物語でも使用数が多く、かつ、多くの作品に共通して使用されている。いわば、和文における基本的漢語動詞語彙とも言える語である。

『源氏』で多用される漢語動詞が、擬古物語でも多用されるといふことから、擬古物語は、『源氏』の漢語語彙を基本的に引き継いでいるということが出来る。和文の基本的漢語動詞語彙のうち、「怨ず」「屈す（気が減入するという意味）」「念ず（がまんするという意味）」といった語は、和文専用語と言ってもよく、鎌倉時代以後、国語文ではほとんど使われなくなる。その点からも、擬古物語は、『源氏』の漢語動詞を引き継いでいると言ったことができよう。

ただし、「調ず」は『源氏』で 9 位の使用数であるが、擬古物語では 2 作品に共通して使用されるのみであり、擬古物語への継承と言う点では、やや疑問が残る。また、『源氏』では使用されていない「案ず」や「損ず」が、擬古物語で 3 作品以上で使用され、比較的多く使用されている点もやや疑問が残る。このように、『源氏』で多用されているにも関わらず、擬古物語ではあまり使用されていない語がある一方で『源氏』では使用例が認められないが擬古物語では使用例が多い語もある。そこで、次に、このようなことが生じている理由について、個々の語を対象に考えてみたい。

#### （1）擬古物語における「調ず」

まず、擬古物語で使用された「調ず」の意味を見てみると、後掲の用例で分かるように「調伏する」という意味のみである。これに対して、『源氏』の「調ず」は、「調伏する」という意味の他にも、「仕立てる」「調理する」のような意味が存する。このように『源氏』と擬古物語の間で「調ず」の意味の違いが見られる理由として、両者の内容の違いによる偶然の結果ということも考えられるのであるが、『源氏』成立時以後、「調ず」の意味が縮小したことによるとも考えられる。意味が縮小した結果、擬古物語での「調ず」の使用数が減少した可能性がある。擬古物語の「あきぎり」が成立した鎌倉時代では、「調ず」の「仕立てる」「調理する」という意味は、失われていたということかもしれない。もし仮にそうだとすれば、擬古物語では、新たに『源氏』成立以後の「調ず」の意味変化を反映していることになり、擬古物語が完全に『源氏』の漢語動詞を継承しているとは言いが難くなる。

〔源氏〕における「調ず」。

「仕立てる」という意味

① よろづの御よそひ何くれとめづらしきさまに調じ出でたま

ひつつ (①帚木 54頁6行目)

② 忍びて調ぜさせたまへりける装束の袴をとり寄せさせたま

ひて (①夕霧 192頁12行目)

〔調理する〕という意味

③ 親しき殿上人あまたさぶらひて、西川より奉れる鮎、近き

川のいしぶしやうのもの、御前にて調じてまゐらす。 (③常

夏 223頁4行目)

④ 太政大臣仰せ言賜ひて、調じて御膳にまゐる。 (③藤裏葉

460頁6行目)

〔調伏する〕という意味

⑤ いみじく調ぜられて (④若菜下 235頁3行目)

⑥ おのを、月ごろ、調じわびさせたまふが情なくつられ

ば (④若菜下 235頁4行目)

〔擬古物語における「調ず」

調伏する〕という意味

⑦ 「罪あるべき身にもあらぬを、この世の間にまよふだに苦

しきに、いたくな調じ給ひそ。」 (石清水物語 35頁17行目)

⑧ 晝にぞ、日頃現はれざりつる御物の怪、後の宮の御方の大

輔の命婦に移りて、いみじう調ずれば、(いはでしのぶ 128

頁9行目)

## (2) 「調ず」以外の漢語動詞の意味比較

擬古物語が『源氏』の漢語動詞をそのまま受け継いでいるかどうかということについて、さらに検証するために、「調ず」以外の漢語動詞についても、『源氏』と擬古物語との間で意味の違いがあるかどうかを確認しておきたい。

『源氏』と擬古物語で意味が変わらない漢語動詞]

怨ず (『源氏』「恨み言を言う」) / (擬古物語)「恨み言を言う」・興

ず (『源氏』「おもしろがる」) / (擬古物語)「おもしろがる」・誦す

(『源氏』「口ずさむ」) / (擬古物語)「口ずさむ」・制す (『源氏』「止

める」) / (擬古物語)「止める」・念ず (『源氏』「がまんする」・祈る」

／(擬古物語)「がまんする」・祈る」

『源氏』のほうが擬古物語より意味が広い漢語動詞]

具す (『源氏』「物を携える・物を添える・物を揃える・物を一緒に

にする・才能等が備わる・親が揃う・妻帯する・人を連れる・同行

する」) / (擬古物語)「物を添える・才能等が備わる・人を連れる・

同行する」・屈す (『源氏』「気が滅入る・ふさぎこむ・悲しむ・気

弱になる」) / (擬古物語)「気が滅入る」

『源氏』のほうが擬古物語より意味が狭い漢語動詞]

啓す (『源氏』「東宮に申し上げる・中宮に申し上げる」) / (擬古物

語)「院に申し上げる・皇太后宮に申し上げる・中宮に申し上げる・

齋宮に申し上げる」・奏す (『源氏』「天皇に申し上げる・院に申し

上げる」) / (擬古物語)「天皇に申し上げる・院に申し上げる・東宮

に申し上げる」

以上、一字漢語動詞の意味を『源氏』と擬古物語との間で比べる  
と、「怨ず」「念ず」など、『源氏』と擬古物語との間で意味が変わ  
らない漢語動詞が多いが、「具す」「屈す」のように、『源氏』のほ  
うが意味の広い語もある。たとえば、「具す」の意味は、『源氏』で  
は、「物を携える・物を添える・物を揃える・物を一緒にする・才  
能等が備わる・親が揃う・妻帯する・人を連れる・同行する」のよ  
うに多くの意味があるが、擬古物語では、「物を添える・才能等が  
備わる・人を連れる・同行する」のように数が減る。特に、「親が  
揃う」「妻帯する」など、家族の状況を示す意味が擬古物語では見  
られなくなる。

『源氏』が擬古物語より意味が広い漢語動詞としては、他に「屈  
す」がある。『源氏』と擬古物語の両方に「気が滅入る」という意  
味があるが、『源氏』には、この他に「ふさぎこむ・悲しむ・気弱  
になる」という意味がある。「ふさぎこむ・悲しむ・気弱になる  
」という意味は、「気が滅入る」の意味とも通じるが、『源氏』で  
「ふさぎこむ」や「悲しむ・嘆く」のように、行動を表す意味や、「気  
弱になる」のように自信のなさを表す意味があることから、『源氏』  
の「屈す」は、擬古物語より広い意味で使われていると考えられる。

このように、先に述べた「調ず」も含め、「具す」「屈す」のよう  
に、擬古物語の漢語動詞のなかには、意味の数が少なくなるものも  
ある。擬古物語のこれらの語は、『源氏』で使われた漢語動詞を受  
け継いだ語ではあるが、中世以後、国語文ではほとんど使われなく  
なる語でもあることから、中世の使用状況を擬古物語のこれらの語

は反映しているのかもしれない。

これに対して、「奏す」「啓す」は、「申し上げる」という意味と  
しては、『源氏』とは変わらないものの、擬古物語では行為の対象  
が『源氏』より多い。例えば、「啓す」は、東宮や中宮の他に院や  
齋宮を対象にする例があり、「奏す」は、天皇や院の他に、東宮を  
対象にする例がある。ただ、中古の物語作品でも、『宇津保物語』  
では、「啓す」が院を対象とする例や、「奏す」が東宮を対象にする  
例があるので、擬古物語の「啓す」や「奏す」が中古の和文にはな  
い使われ方をするようになったとはいえないかもしれない。

#### 二一四 擬古物語における二字漢語動詞

ここでは、二字漢語動詞について、使用された擬古物語の作品数  
と『源氏』での使用数の比較という観点から検討する。

##### (一) 作品に出現する語

加階す(海人)／関白す(木幡)／介錯す

(あさぎり)／細工す(あさぎり)／作文す

(海人)／参座す(石清水)／修行す(いは

で)／修法す(あさぢ)／精進す(海人)／

逍遙す(木幡)／生産す(海人)／舞蹈す

(海人)／勘当す(海人)／追従す(恋路)

##### (二) 作品に出現する語

装束す(海人・菫)／齋宮す(海人・菫)

／学問す(石清水・恋路)／加持す(あさ

ぢ・菫)／祈念す(あさぢ・石清水)／見

証す(石清水・いはで)／三位す(風に・

菫)／経営す(海人・菫)／出家す(風に・

苔) / 化粧す (石清水・恋路)

(3) 作品に出現する語 念誦す (海人・あさち・恋路) / 誦経す (あ

さち・石清水・苔) / 元服す (石清水・海

人・苔) / 下向す (石清水・海人・恋路)

／消息す (石清水・海人・苔) / 卑下す (あ

さち・石清水・恋路)

(4) 作品に出現する語

沙汰す (石清水・海人・苔・恋路) / 唱歌

す (あさち・いはで・海人・風に) / 殿上

す (海人・あさち・石清水・苔) / 供養す

(5) 作品に出現する語

案内す (あさち・海人・いはで・木幢・恋路)

(6) 作品に出現する語

用意す (あさち・海人・木幢・風に・苔・

恋路)

(7) 作品に出現する語

対面す (あさち・石清水・海人・いはで・

木幢・苔・恋路)

(9) 作品に出現する語

御覧す (あさち・あさち・石清水・海人・

いはで・木幢・風に・苔・恋路)

以上の分類結果を見ると、1作品でしか使われない語は14種類で、擬古物語に使用された二字漢語動詞の約4割に相当する。また、2作品で使われる二字漢語動詞も10種類あり、擬古物語で使われる多くの二字漢語動詞は、1作品か2作品といった限られた作品で使われるという傾向がみられる。

また、1作品か2作品で使われた24語の二字漢語動詞のうち、次の9種類の語は『源氏』では使われていない語である。〔関白す〕

「介錯す」「細工す」「作文す」「修行す」「修法す」「生産す」「齋宮す」「祈念す」これらの語の中には、『源氏』成立以後に生まれた語も含まれている可能性がある。

1作品および2作品でしか使用されていない二字漢語動詞について、『源氏』での使用数を確認すると、5例以下の語が、11語存した。〔加階す〕「参座す」「精進す」「遣遥す」「舞踏す」「勘当す」「学問す」「見証す」「三位す」「経営す」「出家す」「源氏」での使用数が5例以下のこれらの二字漢語動詞と『源氏』で使われない語の数を合わせると20語になり、擬古物語で1作品か2作品でしか使われない漢語動詞の約9割になる。このように、擬古物語で1作品か2作品でしか使用されない語は、『源氏』でも使用数が少ない傾向にある。残りの4語の『源氏』での使用数は、「追従す」が6例、「装束す」が7例、「加持す」が9例、「化粧す」が14例である。擬古物語で使用される作品数が少ないこれらの語が、『源氏』で比較的多くの使用数が認められる理由は定かではないが、おそらく作品の内容に起因するのであろう。すなわち、「化粧す」「装束す」「加持す」が使われやすいような、宮廷行事の場面が『源氏』で多いことや、葵上や紫の上をはじめとする多くの女性の出産や病気の場面が多いということが、『源氏』で比較的多くの使用数が認められる一因であるかと考える。なお、『源氏』での使用数が比較的多い「化粧す」は、多く「心化粧す」のように和語との複合語として使われ、行事の場面に関わらず、相手に好意を持たれる心の在り様を表すために、使用数も比較的多いのであろう。

このように、個々の使用語数は作品の内容と関わりと考えると概ね、擬古物語で、少ない作品でしか使われない二字漢語動詞は、概



して『源氏』で使われていないか、使われていても使用数の少ない語であるという傾向があることは認めてよいであろう。一方、擬古物語で多くの作品に共通して使用される「御覧す」「対面す」「用意す」「案内す」は、『源氏』でも使用数が上位の語である。つまり、『源氏』で使用数の多い二字漢語動詞は擬古物語でも多くの作品に使われ、『源氏』で使用数の少ない二字漢語動詞は擬古物語でも少ない作品にしか使われていないということになる。

漢語動詞全体を見ると以上のような傾向にあると言えるのであるが、個々の語を見ると、特徴のある語がいくつか見出される。例えば、「化粧す」「消息す」「誦経す」「卑下す」のように、擬古物語では3作品以内の使用であるが、『源氏』では使用数が多い語も存する。また、「関白す」「介錯す」「作文す」「修行す」「細工す」「修法す」「生産す」「齋宮す」「祈念す」「下向す」「沙汰す」のように、『源氏』で使用数がない語もある。

このうち「沙汰す」は、擬古物語で4作品で使用され、使用数も擬古物語で8位と比較的多く使われている語であるが、『源氏』では使われていない。「沙汰す」は『源氏』よりも前に成立した『落窪物語』<sup>10</sup>に名詞「沙汰」として1例が使われるものの、「沙汰す」という漢語動詞では使われていない。これに対して、『源氏』以後に成立した『宇治拾遺物語』<sup>11</sup>では漢語動詞として9例が使用され、『栄花物語』<sup>12</sup>では2例が使用されている。この状況から判断すると、「沙汰す」は『源氏』が成立したころには「沙汰」という名詞としては存したものの、漢語動詞としては使われていなかったと考えられる。『源氏』に名詞「沙汰」がないのは、和文において多用される語ではないためであろう。なお、「沙汰す」は、後に成立

した『今昔物語集』、『平家物語』等の和漢混交文には使用される。〔今昔物語集〕<sup>13</sup> 13例、『平家物語』<sup>14</sup> 3例〕擬古物語に「沙汰す」が多くの作品で使われているのは、中世の和漢混交文や古記録、古文書で多用されている状況を反映しているのかもしれない。すなわち、和漢混交文という文体で使用される漢語動詞が、擬古物語で新たに使用されているということも考えられる。なお、「沙汰す」が使われている「海人の刈藻」は、平安時代末から鎌倉時代初期にかけて成立したとされ、「石清水物語」は鎌倉時代中期成立とされ、「若の衣」「恋路ゆかしき大将」ともに鎌倉時代の成立とされる。このように、「沙汰す」が使われている作品は、擬古物語の中でも成立が遅い作品であることも、「沙汰す」の成立時期と関連するかもしれない。

「下向す」も、擬古物語で3作品〔石清水物語〕「海人の刈藻」恋路ゆかしき大将〕で使われる語であるが、『源氏』では使われていない。名詞「下向」も『源氏』で使われていない。『日本国語大辞典』によれば、平安時代古記録の「小右記」に「下向」の使用例が見られることから『源氏』成立時には存した語である。『枕草子』<sup>15</sup>に一例、「下向す」の例が見られる。このことから、『源氏』で使われる可能性もあったと思われるが、和文では使われることが少ない語であったのかもしれない。『源氏』成立以後では、「下向す」の例が、『宇治拾遺物語』に1例、『平家物語』に6例、狂言<sup>16</sup>に10例使われている。この点からすれば、擬古物語に漢語動詞「下向す」が複数の作品で使われているのは、それぞれ『源氏』以後に成立した語を使用しているとも考えられる。

次に、擬古物語で、2作品以内で共通して使用されている漢語動

詞の『源氏』での使用数を一覧にして示すと次のようになる。

【擬古物語で2作品まで使用される漢語動詞（ ）内の数字は『源氏』での使用数】

閑白（使用数なし） 介錯（使用数なし） 細工（使用数なし）  
作文（使用数なし） 修行（使用数なし） 修法（使用数なし）  
斎宮（使用数なし） 祈念（使用数なし） 学問（使用数なし）  
生産（使用数なし） 勘当（1例） 道暹（1例） 三位（1例）  
参座（2例） 精進（2例） 見証（2例） 出家（2例）  
経営（3例） 加階（3例） 舞踏（3例） 装束（7例）  
加持（9例） 化粧（14例）

右に示すように、擬古物語で1作品単独で使用されるだけか、もしくは2作品までしか共通して使用されない二字漢語動詞は、「装束す」「加持す」「化粧す」を除き、『源氏』では3例以下の少ない使用数である。使用数がない語も10語ある。このように、擬古物語で共通の作品数が少ない語は、『源氏』でも使用数が少ない。このような状況になるのは、これらの語が『源氏』と擬古物語のどちらでも、使われる場面が少ないからであろう。これらの語の中には、「閑白す」「斎宮す」「三位す」のような官位や身分を表す語や「参座す」「加階す」「見証す」「舞踏す」のような宮中での行事や所作を表す語が占めている。作品中に宮廷行事と関わる場面が少なければ、これらの語の使用数も限定されると考えられる。

擬古物語で、共通の作品数が最も多い語は「御覧す」で、9作品で使われている。次いで、「対面す」「用意す」「案内す」が5作品

以上で使われている。このうち、「御覧す」は『源氏』での使用数が第1位であり、次いで「対面す」が2位、「用意す」が3位、「案内す」が10位である。これらのことから、擬古物語において多くの作品に共通して使われている二字漢語動詞は、『源氏』でも使用数が上位であるといえる。さらに、『源氏』で多くの使用数が認められる他の二字漢語動詞をみると、「供養す」（5位）が擬古物語で4作品に使用され、「殿上す」（9位）が擬古物語で4作品に使用されている。他に『源氏』での使用数が6位の「消息す」が3作品、7位の「誦経す」が3作品、9位の「卑下す」が3作品、10位の「案内す」が5作品と、『源氏』で使用数が上位の語は、擬古物語でも、概して多くの作品で共通して使われる傾向にある。

なお、擬古物語に使われた二字漢語動詞の作品別語数は次のとおりである。それぞれの語の使用数の違いは、作品の分量の違いによるものと考えられる。

海人の刈藻（20語） 石清水物語（15語） 苔の衣（14語） あ  
さぢが露（12語） 恋路ゆかしき大将（8語） いはでしのぶ（7語）  
木幡の時雨（6語） 風につれなき（5語） あきぎり（3語）

### 三 二字漢語動詞の意味

#### 三―一 『源氏』と擬古物語の比較

ここでは、二字漢語動詞について、意味の観点から、『源氏』と擬古物語を比較することとする。以下に、『源氏』と擬古物語のどちらにも使われている二字漢語動詞について、「意味が同じ語」と

「意味が異なる語」に分け、一覧にして示す。

【『源氏』と同じ意味】

△加階す▽『源氏』も擬古物語も「位が昇る」という意味である。

△勘当す▽『源氏』も擬古物語も「処罰する」という意味である。

△供養す▽『源氏』も擬古物語も「仏供養、経供養をする」という意味である。

△経営す▽『源氏』も擬古物語も「世話や接待をし、忙しく立ち働く」という意味である。

△見証す▽『源氏』も擬古物語も「碁・蹴鞠などの勝負を判定する」という意味である。

△参座す▽『源氏』も擬古物語も「儀式に参列する」という意味である。

△出家す▽『源氏』も擬古物語も「俗世間の生活から離れて、僧侶を志して仏道修行に専念する」という意味である。

△唱歌す▽『源氏』も擬古物語も「笛・琴・琵琶などの旋律を、譜によって口で歌う」という意味である。

△正三位す▽『源氏』に「正三位す」があるが、擬古物語には「三位す」という語がある。語形が完全に一致するわけではないが、どちらも官位を示す語を語幹とする点で共通するので、ここでは両者を扱うことにする。『源氏』の意味は「正三位に昇る」で、擬古物語の意味は「三位に昇る」という意味である。

△精進す▽『源氏』も擬古物語も「身を清める・精進潔斎する」という意味である。

△装束す▽『源氏』も擬古物語も「衣裳を着る」「衣裳を整える」

という意味である。

△道遥す▽『源氏』も擬古物語も「見て回る」という意味である。

△対面す▽『源氏』も擬古物語も「面と向かって会う」という意味である。

△殿上す▽『源氏』も擬古物語も「童を殿上の間や紫宸殿に昇らせる」という意味である。

△卑下す▽『源氏』も擬古物語も「へりくだる」という意味である。

△舞踏す▽『源氏』も擬古物語も「朝廷などでの朝賀・即位・節会・叙位・任官などの際の拝礼の作法を行う」という意味である。

△用意す▽『源氏』も擬古物語も「準備・支度する」「用心する」という意味である。

【『源氏』と異なる意味】

「『源氏』のほうが広い意味」

△化粧す▽

『源氏』は、「白粉を塗って、身づくろいをする」という意味で使われる。また、「化粧す」で「そわそわする」「心が浮き立つ」という意味である。擬古物語には、「白粉を塗って、身づくろいをする」という意味は見られず、「化粧す」で、「緊張する」「心配りをする」という意味である。

△御覧す▽

『源氏』では、主に「見る」の尊敬語の意味を表すが、「知る」「気に入る」「会う」「世話する」「思う」「経験する」「応対する」の尊敬の意味を表すなど、様々な意味で使われる。また「御覧じ知る（お気づきになる）」「御覧じ入る（召し上がる）」など、多くの複合

語を形成する。擬古物語でも、主に「見る」の尊敬語を表し、「御覧じ知る」「御覧じ入る」の複合語も形成する。ただ、『源氏』に比べて、「見る」の尊敬語として使われる例が多く、他には「世話をする」の意味での使用例が3例存するだけで、意味の広さは、『源氏』ほどには存しない。

#### 《消息》

『源氏』では、「報告する」「招待する」「便りを出す」「面会を申し入れる」「挨拶する」という意味で使われるが、擬古物語では「面会を申し入れる」という意味だけである。

#### 『源氏』のほうが狭い意味

#### 《案内す》

『源氏』の「案内す」は、文脈的な意味としては、個々の意味は異なるが、大きく分類すると、①「面会して事情や意向を聞いただす」と②「挨拶を第三者に取り次ぐ」に分けられる。擬古物語にも、①と②の意味があるが、他に「家に招き入れる」という意味があり、この意味は『源氏』には見られない。

このように、『源氏』と擬古物語の二字漢語動詞の意味を比べると、21語のうち17語の意味が一致する。『源氏』での意味が広い語としては、「化粧す」「御覧す」「消息す」がある。これらの語の意味が『源氏』で広くなっている原因としては、作品の分量の違いにより、使用場面の有無が生じた可能性も存するもの、それでもやはり「御覧す」（『源氏』での使用数1位／擬古物語での使用数1位）、「消息す」（『源氏』での使用数7位／擬古物語での使用数6位）

は使用数が多いことから、分量の違いによって生じたとは考えにくい。『源氏』を模した擬古物語であっても、意味の縮小がされたということを考えてよいであろう。

また、『源氏』での意味が狭い語としては、「案内す」が挙げられる。擬古物語の「家に招き入れる」という意味は、「内の方に案内して」（木幡 12頁8行目）とある例である。これは、「人に取り継ぐ」という意味から派生したと考えられ、「内の方に」のように移動する場所が示されており、「家に招き入れる」という新たな意味が生じていると考える。「道や場所をよく知らない人を手引きすること。先にたつて目的の場所まで連れていったり、ある場所を見せて歩いたりすること。」（日本国語大辞典第二版 初出例 奥の細道）のような近世的な意味の先駆けになるような使用例である。「木幡の時雨」は鎌倉時代の成立とされるので、この頃には、「案内す」に新しい意味が生じ、擬古物語ではその意味を反映しているということかもしれない。

このように、『源氏』と擬古物語の二字漢語動詞の意味を比べると、意味が共通する語が多くを占めながらも、一部に意味の拡大や縮小を示すような例が存する。

### 三 漢語動詞語幹の用法

#### (1) 一字漢語動詞

ここでは漢語動詞語幹の用法について、『源氏』と擬古物語を比較する。ここで語幹という用語を用いたのは、注にも示したように一字漢語動詞では、間に助詞が入る例や、漢字漢語を修飾する例

が無いことから、動詞一語という特徴があることによる。例えば、「奏す」の場合、「奏す」のような例や「おごそかなる奏す」のような例がない。このことから、「奏」を語幹とし、「す」を活用語尾とする考え方が成り立つ。これに対して、二字漢語動詞の場合は、「ごごかしこの用意などす」のように、漢字漢語と「す」の間に助詞が入る例や、連体修飾語を取る例が認められる。このことから、二字漢語動詞の場合は、漢字漢語を語幹とし、「す」を語基として全体で複合語とする考え方も成り立つ。このように考えると、二字漢語動詞の漢字漢語は語基とする考えも成り立つが、ここでは、一字漢語動詞と二字漢語動詞の統一を図るために、語幹という用語を使用した。

まず、一字漢語動詞を語構成の観点から分類する。一字漢語動詞の語構成を見ると、擬古物語のほうが、『源氏』に比べて単純になる傾向が見えてくる。例えば、複合動詞形は、『源氏』にも擬古物語にも見られるが、擬古物語のほうが明らかに少ない。「うそぶき誦じあふ」「歌うたひ興じあふ」のように複合動詞がさらに他の動詞と合わせて使われる例も、『源氏』に見え、擬古物語には見られない。

また、「うち誦じ独りごつ」「うち誦じなす」のように漢語動詞に接頭辞がつく形が他の動詞と合わせて使われる例も、『源氏』に見えるが、擬古物語には見えない。さらに、「誦じがちなり」「臆しがちなり」のように漢語動詞に接尾辞が付加し形容動詞になる例も、『源氏』に見えるが、擬古物語には見えない。

このように、『源氏』の一字漢語動詞は、他の和語動詞や接尾辞とともに使われ、多様な語形で使われている。これに対して、擬古

物語の一字漢語動詞は、漢語動詞単独で使われる傾向があり、『源氏』のような造語力が見られない。擬古物語では『源氏』からの語の継承がなされているものの、すでに語の活力は失われ、語の用法の固定化が進んだということができよう。

#### 〔複合動詞〕

##### 〔源氏〕

念じゐる／念じ返す／念じ過ぐす／念じわたる／念じはつ／念じあふ／念じ入る／念じあまる／思ひ念ず／奏し下す／伝え奏す／漏らし奏す／奏しおく／奏しなす／奏しなほす／誦じののしる／誦じなす／誦じ騒ぐ／取り具す／引き具す／腹立ち怨ず／怨じはつ／怨じうけふ／怨じおく／思ひ屈す／まめだち屈す／思し屈す／屈し入る／制したまふ／制し諫む／手かき制す／興じめづ／怖ぢ困ず／見たまへ困ず／責められ困ず／もの聞き困ず／思ひ困ず／さぶらひ困ず／封じ籠む／惜しみ領ず／領じ作る／領じはつ／憑きしみ領ず／調じ出づ／調じわぶ

##### 〔擬古物語〕

思ひ念ず／念じ過ぐす／念じ入る／念じ返す／念じ思ふ／奏しおく／引き具す／書き具す／巻き具す／誘ひ具す／乗り具す／取り具す／急ぎ具す／思ひ屈す／制しおはす／興じおはす／興じ申す／興じあふ／思ひ困ず／封じ籠む／封じ固む／啓しなす／臆しはつ／おどろき臆す

〔複合動詞が他の動詞と合わせて使われる〕

##### 〔源氏〕

うそぶき誦じあふ／歌うたひ興じあふ

〔漢語動詞に接頭辞がつく〕

〔源氏〕 うち誦す／うち具す／うち怨す／うち屈す

(擬古物語) うち誦す／うち具す／うち屈す／もて興す

〔漢語動詞に接頭辞がつく形が他の動詞と合わせて使われる〕

〔源氏〕 うち誦じ独りごつ／うち誦じなす

〔漢語動詞連用形に接尾辞がつき形容動詞となる形〕

〔源氏〕 誦じがちなり／臆しがちなり

〔漢語動詞連用形に接頭辞がつく〕

〔源氏〕 もの怨じ／うち怨じ

(擬古物語) もの怨じ／うち怨じ

〔複合動詞形に助詞が入る〕

(擬古物語) 怨じもはつ

〔漢語動詞連用形が名詞となる〕

〔源氏〕 屈じ

〔漢語動詞に形容詞がついて複合語を作る〕

〔源氏〕 屈じいたし／信じがたし

(擬古物語) 屈じいたし

〔漢語動詞に形容詞がついた複合語形に接尾辞がついて形容動詞となる〕

〔源氏〕 屈しいたげなり

〔漢語語幹に修飾語のついた形がサ変動詞の目的語になる〕

〔源氏〕 横ざまの死をす

## (2) 二字漢語動詞

次に、二字漢語動詞について、語の形態面から、『源氏』と擬古

物語の漢語動詞を比較する。

二字漢語動詞については、擬古物語は、『源氏』の二字漢語動詞の形態を受け継いでいるといえる。すなわち、「漢語に接頭辞がつく」「漢語が複合名詞となる」「漢語に修飾語がつく」「漢語語幹と「す」の間に助詞などが入る」「複合動詞」という形態は、『源氏』にも擬古物語にも見られる。「漢語動詞に接頭辞がつく」は、『源氏』にしか見られないが、「化粧す」だけに見られることであり、これをもって『源氏』と擬古物語の間に差があるとは言い難い。「連用形名詞」については、「御覧じ」「誦経し」が擬古物語に見られるが、語数、使用数も少なく、これをもって、擬古物語において二字漢語の連用形名詞が盛んに行われたとまでは言えないであろう。

また、「漢語に接頭辞がつく」では「御元服」「御誦経」「御装束」が共通し、「漢語が複合名詞となる」にも「心化粧す」「童殿上す」「仏供養す」が共通する。「漢語語幹と「す」の間に助詞などが入る」「誦経」「唱歌」「用意」が共通する。「複合動詞」では、「経営す」「御覧す」が共通する。複合動詞になる漢語の種類としては、『源氏』が5語、擬古物語が3語で、いずれも、「御覧す」の複合語形の数をもっとも多い。このように、「複合動詞」からみても、『源氏』と擬古物語との間に、大きな差はない。

〔漢語に接頭辞がつく〕

〔源氏〕 御元服す／御誦経などす／御加持などす／御誦経などとりわきす／御誦経す／御対面す／御装束す

(擬古物語) 御元服す／御誦経などす／御装束す／御消息す／御

精進す

〔漢語動詞に接頭辞がつく〕

〔源氏〕 うち化粧す

〔漢語が複合名詞となる〕

〔源氏〕 心化粧す／童殿上す／経、仏供養す／御獄精進す／壺装束す

〔擬古物語〕 心化粧す／童殿上す／仏供養す

〔漢語に修飾語がつく〕

〔源氏〕 御車の装束す／金剛子の数珠白き御装束、しの玉の装束す／参りの夜の人々の装束す／白き御装束す／正下の加階す

〔擬古物語〕 女房の装束す／あざやかなる御装束す／いとうるはしき装束す／今一度の対面をもす／その用意す／御衣の用意す

〔漢語語幹と「す」の間に助詞などが入る〕

〔源氏〕 誦経などす／誦経にす／御誦経などす／誦経などとりわさす／唱歌もす／ここかしこの用意などす／御加持などす／念誦などす

〔擬古物語〕 誦経あまたす／誦経などあまたす／御誦経などす／唱歌しのびやかにす／用意いたうす／対面などす／対面をもす／学問などす／学問をす

〔複合動詞〕

〔源氏〕 経営し歩く／経営しあふ／御覧じ馴る／御覧じがたし／御覧じゆるす／御覧じ知る／御覧じ入る／御覧じつく／御覧じくらぶ／御覧じ過ぐす／御覧じ棄つ／御覧じ分く／御覧じ放つ／御覧じ得る／御覧じは

つ／知ろしめし御覧す／御覧じ定む／御覧じゆるす

／御覧じ当つ／御覧じなす／御覧じ置く／御覧じとどむ／御覧じゆるす／御覧じおこす／御覧じ咎む／御覧じなほす／うちとけ御覧す／御覧じさす／追従しありく／追従し寄る／消息しおこす／化粧じ暮らす／化粧じ添ふ

〔擬古物語〕 立ち居経営す／御覧じ驚く／御覧じ放つ／御覧じあふ／御覧じおこす／御覧じ入る／御覧じ分く／うち御覧す／御覧じ廻す／御覧じ放つ／御覧じ通す／御覧じ初む／御覧じわたす／御覧じめぐらす／御覧じ知る／御覧じ置く／御覧じ出だす／御覧じ出づ／御覧じ馴る／御覧じ過ぐす／御覧じやる／御覧じつく／御覧じあく／御覧じかはす／御覧じよるこばす／御覧じ落とす／御覧じ後見す／御覧じ上ぐ／対面し初む

〔複合動詞に接頭辞がつく〕

〔源氏〕 うち化粧じつころふ

〔連用形名詞〕

〔擬古物語〕 御覧じもす／誦経しに

(3) 漢語動詞語幹と名詞との関係

— 一字漢語動詞語幹と二字漢語動詞語幹の違い —

〔源氏〕 にも擬古物語にも使用されている18語の一字漢語動詞のうち、漢語動詞語幹が名詞として使用された例が『源氏』にも擬古物語にもない語は12語あり、約6割である。このことから、一字

漢語動詞語幹が名詞単独では使用されることが少なく、漢語動詞として一語化している傾向にあると言えよう。一方、一字漢語動詞語幹が名詞として使用された例が『源氏』にも擬古物語にもあるものは「興」のみであった。ただし、実際は、「興あり」という形であり、「興」が単独の名詞で使われるとは言い難い。また、『源氏』にあり擬古物語にない漢語動詞語幹は「具・封・臆」で、『源氏』になく擬古物語にある漢語動詞語幹は「念・信」であった。「具」は、「脇息」など、すべてその御具ども（若菜上）のように「調度」「用具」の意味で使われる。「具す」は、「伴う」「備わる」等の意味なので、「具す」の漢語語幹「具」は、先に挙げた調度を意味する「具」とは、直接には関係が無いと考えられる。したがって、「具す」の漢語語幹の「具」が単独で名詞として使用された例も実際にはないということが出来る。また、「封」も、「御封」すなわち「封戸」のことで、これも、文書に封をする意味の「封ず」の語幹とは直接には関係がないといえよう。「臆」は、「臆たかき」という形容詞が一例あるのみであり、漢語語幹が単独で名詞として使用された例とは認めがたい。

擬古物語の「念」は、「念なし」という形容詞の使用例のみである。「念なし」は、『日本国語大辞典第二版』に掲載されている初出例を参考にすれば、「金刀比羅本保元物語」の例を挙げているので、中世になってから新たに生じた語である可能性がある。なお、「念なし」の意味は、「残念だ」という意味なので、「祈る」「我慢する」という意味の「念ず」の漢語動詞語幹「念」とは、直接には関係が無いと考えられる。「信」は、「信おこる」のように使われ「信頼が生じる」という意味である。これは、「信用する」という意味

の「信ず」の漢語動詞語幹「信」との意味的な関りが認められる。この「信」を除けば、漢語動詞語幹が単独で名詞として使われた例は、無いことになる。このことから、一字漢語動詞は、漢語語幹と「す」が一体となって一語化しているということが出来る。これに對して、二字漢語動詞語幹は、例えば「用意す」「消息す」「装束す」の漢語動詞語幹である「案内」「消息」「装束」が、単独で名詞として使われる。よって、二字漢語動詞語幹は、名詞としての性質を有していると考えられる。この名詞的性質は、次のように、二字漢語動詞が修飾語をとる例や漢語動詞語幹と「す」との間に助詞が入る例があることから認めることができる。

まめきたるさましたる人の、用意いたくして、さすがに乱りがはしき、(④138頁15行目)

艶なる歌も詠まず、気色ばめる消息もせで、(①75頁9行目)

数珠の玉の装束したる、やがてその国より入れたる箱の唐めいたるを、(①21頁9行目)

以上、漢語動詞の語幹が名詞として使われるかどうかということについて、一字漢語動詞語幹と二字漢語動詞語幹とは、違いが存することを述べてきた。ただし、『源氏』と擬古物語のどちらも、一字漢語動詞語幹の名詞として使用はほとんど見られず、二字漢語動詞語幹の名詞として使用は多く見られるという点では、『源氏』と擬古物語の間で変わりは無かった。

以上、本節では、漢語動詞語幹の形態的側面を中心に述べてきたが、『源氏』と擬古文の間で、大きな変化は見られないということ



が確認できた。

#### 四 まとめ

本稿では、『源氏』と擬古物語について、漢語動詞という観点から、語の種類や使用数、語幹の文法的特点といった観点から比較を行ってきた。その結果、以下のことが分かった。

##### 1 語の種類について

(1) 『源氏』で使用数が10位までの一字漢語動詞は、擬古物語においても、その10語中8語が上位10位の中に入る。このように『源氏』でよく使われる語は擬古文でもよく使われるということができ

る。

(2) 擬古物語の使用数10位までの一字漢語動詞で、『源氏』の10位以内にはない語は、「興ず」「案ず」「損ず」である。このうち「案ず」「損ず」は、『源氏』には一例も使用されていない。このように、擬古物語では比較的多く使用されているが、『源氏』では全く使用されていない語もいくつか存するが、全体的には、『源氏』と擬古物語で使用される一字漢語動詞の種類は、かなり共通しているといえる。

(3) 『源氏』で使用数10位までの二字漢語動詞については、擬古物語の上位10位までに6語使われている。これら6語は、「御覧す(源氏1位・擬古1位)」、「対面す(源氏2位・擬古2位)」、「用意す(源氏3位・擬古3位)」、「供養す(源氏3位・擬古3位)」、「消息す(源氏6位・擬古7位)」、「案内す(源氏10位・擬古6位)」で、順位もほ

ぼ一致する。残りの5語も擬古物語に使用されている。このように二字漢語動詞の種類も共通しているといえる。ただし、擬古物語に使用される二字漢語動詞のなかには、『源氏』以後に成立した語が含まれる可能性もある。

(4) 『源氏』と擬古物語で、意味の違いについて検討した結果、両者の間で違いはほとんど見られなかったが、なかには「調ず」などのように、意味の拡大や縮小が生じていると考えられるような語も認められた。

本稿では、『源氏』を踏襲したといわれる擬古物語において、漢語動詞の使用状況を確認することを目的として考察を進めてきた。結果としては、擬古物語の漢語動詞は『源氏』を踏襲しているという特徴を見出すことができた。

「念ず」「奏す」「屈す」「怨ず」等、『源氏』で使用数の上位にある語は、擬古物語でも、使用数が上位にある。しかし、これらの語は、和漢混交文での使用数は多くない。特に「怨ず」「屈す」(意気消沈するという意味)「念ず」(がまんするという意味)などの語は、平安時代和文特有語の性質を有する。このような語は、擬古物語では、『源氏』を踏襲してはいるものの、かろうじて残存しているという状況である。また、「念ず」「奏す」「誦す」など一字漢語動詞の多くは、「念仏す」「奏上す」「奏聞す」「念誦す」「読誦す」といった二字漢語動詞に移行することもあったであろう。その結果として、一字漢語動詞「念ず」「奏す」「誦す」の使用数が減少しているとも考えられる。したがって、今後、一字漢語動詞の二字漢語動詞化という観点からの考察も必要であろうと考えている。

1 齊藤由衣子 「擬古物語文体の特徴 下二段「たまふ」と四段「たまふ」の混乱」(『奈良教育大学国文 研究と教育』20号 1997)

2 古典語の漢語動詞の漢語部分を語基とするか語幹とするかは、各論文も不統一である。一字漢語動詞と二字漢語動詞ではサ変動詞との結合度が異なるので、この点からすれば、二字以上の漢語動詞はサ変動詞との複合語として語基とすべきかもしれない。一字漢語動詞は、結合度が強いので、動詞の内部と考えて語幹と活用語尾の考え方が適用されるかもしれない。たとえば「愛す」については、「愛」単独での使用例がないことから、「愛す」の「愛」を語幹とし、「す」を活用語尾とすることができ。形態論的には、「愛」を語基とし、「す」を接辞とし、派生語に分類することもできよう。これに対して、「対面す」は、「対面などす」のように間に助詞が入ることができるので「対面」は名詞で「す」は動詞という構成(語基+語基)の複合語として考えることもできる。このように、古典語の場合、一字漢語動詞と二字漢語動詞の間には、形態上、違いが存すると考えられ、本来なら一字の場合は語幹、二字以上の場合には語基とすべきかもしれないが、本稿では、便宜的な措置として、漢字漢語の部分については、語幹という用語で統一することとする。

3 『源氏物語』における用例の検索は、『源氏物語大成』(池田亀鑑 編著 中央公論社 一九五三)を使用した。

4 用例は、『中世王朝物語全集』(笠間書院)より検索した。検索方法は、筆者が上記の本を読み進めながら漢語動詞を拾い上げて

いった。なお、対象作品は、「あきぎり」「あさぢが露」「石清水物語」「海人刈藻」「いはでしのぶ」「木幡の時雨」「風につれなき」「苔の衣」である。

5 『九本対照竹取物語語彙索引』(上坂信男編 昭和55年 笠間書店)によって、「あんず」が1例あることを確認した。ただし、「案す」と表記されているのは、内閣文庫本だけで、他は「あんず」「あむす」「安す」という表記である。ここでは、内閣文庫本の表記を取り、「案す」の例として扱うこととした。

6 『日本国語大辞典第二版』小学館国語辞典編集部編 小学館 2000年)

7 東京大学史料編纂所の古記録フルテキストデータベースを利用して検索した。(2021年8月20日から数回にわたり検索 <https://www.gph.u-tokyo.ac.jp/ships/>)

8 『源氏』の用例は『新編日本古典文学全集』(小学館)によった。拙稿「宇津保物語における「奏す」「啓す」の特殊用法(1)——「奏す」と「申す」の意味的關係——」(広島女学院大学日本文学22号 2012年)、「宇津保物語」における「奏す」「啓す」の特殊用法(2)——「奏す」と「申す」の意味的關係——」(広島女学院大学国語国文学誌)43号 2013年)

10 『落窪物語索引』(松尾聡 他編 明治書院 昭和42年)による。  
11 『宇治拾遺物語総索引』(境田四郎監修 清文堂出版 昭和50年)による。

12 『采花物語 本文と索引 自立語語彙索引篇』(高知大学人文学部国語史研究会編 武蔵野書院 昭和60年)による。

13 『今昔物語集 漢字索引』(馬淵和夫監修 笠間書院 昭和59年)

による。

<sup>14</sup> 『平家物語総索引』（復刻版）（笠榮治編 牧野出版 平成10年）による。

<sup>15</sup> 『校本枕草子 総索引』（田中重太郎 編 古典文庫 昭和44年）による。

<sup>16</sup> 使用数の検索は、『狂言六義総索引』（小林賢次 代表編者 勉誠出版 2005年）による。

### 【追悼の辞】

関先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。筆者は、大学卒業以来、ずっと平安時代和文の漢語動詞をテーマに考察を進めてきました。これは、大学の授業で先生がふとおっしゃった「平安時代和文の『啓す』は日常会話語だったのだろうか」というお言葉がずっと心にとどまっているためです。私を研究の道に導いてくださった恩師に心より感謝申し上げます。

（ゆのき・やすし）